語源について

先日、叔母の法要に出向いたおりに、書斎の中に面白そうな文献が目にとまり一読して見る、語源に関する書物“語源のたのしみ”岩渕鋭太郎著書では普段つかっている言葉には語源との違いが多くあることが書かれていた。

地元の魅力シリーズで郷土史などを探索してきた、その中で地名についてもなぜこの地名なのか、由来は調べていくとこの地の歴史も見えてくる。しかし専門的な内容まで掘り起こすことは無理であり、地域の人達が地元の良さを少しでも認識してもらえればとブログにしてきた。

原市場地区の方言シリーズで昔の生活で使われていた言葉は生活、地名など地域のことば(なまり)であり、“語源のたのしみ”とは繋がりやかかわりが拾い出せるかと興味をもち記載してみることとした。

“語源のたのしみ”岩渕鋭太郎　著書より抜粋して記載しました。
日常で普通に会話している言葉の中から、その語源の言葉の起こりと歴史的な変遷をさぐっていきます。

日本語がわかる外国人と一緒に食事した時、外国人は早速「結構」についての言葉で、日本人は料理が大変おいしい時に「結構です」と言ってほめる。
そうかと思うと、もう十分です、これ以上はいただけませんと断る時にも「結構です」と言う。これはどういうわけなのかというのである。

一体、「結構」が大変おいしいという場合に使われるのはなぜであろうか。
「結構」が、ほめ言葉として使われるのは、何も料理だけとは限らない。他の場合にも使われる。

もともと「結構」は、「構えを結ぶ」意であって、家屋や文章を組み立てること、また、その組み立て、しくみ、構えを意味した。ことに善美（物事がよく、しかも美しいこと。りっぱで美しいこと。また、そのさま）をつくして作った建築物などを指して「結構」と言ったようである。そういうところから「結構」だけでも、その中に「見事」「立派」というのが含まれているようになったのかも知らないと思う。あるいは、たとえば、「お天気です」と言えば、好天を意味するが、本来は「いい天気」とも「悪い天気」とも言えるはずのものである。それが、「いい天気です」としばしば言っているうちに「いい」を省略した「お天気」だけでも好天を意味するようになってしまった。同様に、「結構」も「見事な結構」「立派な結構」と言っているうちに、「結構」自身に「見事」「立派」という内容が含まれるようになったのかも知れない。

「結構」は「見事」「立派」という意味から更に転じて、「お元気で結構です」「これだけあれば結構です」のような使い方をするようになった。この場合、満足が行

く、十分であるというほどの意味と考えられる。そうすると、食事をする時などに、「もう結構です」と断るのは、この使い方に近いものと言えるだろう。
　このように、語は使って行くうちに、微妙に用法がずれて行き、結局意味が変化して行くのである。お礼を言う場合に普通、「ありがたい」「ありがとう」という語を使う。この語は、元来「有り難し」であって、あることが困難であるという意味、すなわち、この世にめったにない、世にまれである、極めて珍しいという意味である。
　「字を誤る」の「誤る」、「罪を謝る」の「謝る」も共に「アヤマル」である。漢字で「誤る」「謝る」と書くと、全然別の語のように思えるが、実は、同一語であったものが、意味の分化につれて漢字で書き分けるようになったものである。
アヤマルは、元来、正しさにはずれる意を表す語であった。従って、間違える意にもなったが、間違って、その間違いを自ら認めて相手に表明することから、過去に対してわびる意が生まれたのであろう。
　語源がわかることは楽しいことであるけれど、実際に言葉を使う場合に、一語一語の語源がわからなければ、言葉が使えないというようなことはない。語源がどうであろうと問題ないことが多い。実際に言葉を使う場合に語源を気にすることは必ずしも必要でない。
そういう場合に大事なのは、むしろ、その本義は、歴史的なものではなく、現代語における本義である。本義さえしっかりととらえておれば、どういう場合には使ってもいいが、どういう場合には使わない方がいいという判断が出来るはずである。

・あまのじゃく：つむじまがり。「あまのじゃこ」「あまんじゃく」などとも言う
　「天の邪鬼」と書くことが多い。人の言うことにさからって片意地を通すことである。「あいつはあまのじゃくだから、反対するにきまっているよ」。
　もと、民話などに悪役として登場する鬼。神話に出てくる「天探女（あまのさぐめ）」から出た言葉かと言う。
　当用：さしあたりの用　「当用日記」「当用漢字表」などに用いる。「当面の用」「当座の用」の意味である。「常に用いること」の意なら「常用」という語が当る。
・のれんに腕押し：力を入れても手応えのないこと。
　「のれん」は上から垂らしてある布。これを押したところで手応えはない。
　「のれんと相撲」ということわざもある。なお、「のれん」は、商店の軒先や出入り口にあって、多く屋号などを染め抜く。そこで「のれんにかかわる」は「店の信用にかかわる」の意として使われる。また信用にかかわるようなことをした場合、「のれんにきずがつく」という表現をする。
　なお、「のれん」は「暖簾」と書く。鎌倉室町時代に禅宗と共に日本にはいった語

であり、唐音(とういん)である。もと簾(す)のすきまをおおう布のとばりのことである。

- おおらか：おおよう「おおらかな人柄」「物の考え方がおおらかだ」「おおらかにふるまう」のように形容動詞として使われる。古形は「おはらか」であって、元来は分量の多いことを言う語であったらしい。
- 未曾有：きわめて珍しいこと。「いまだかつてあらず」ということである。「ミゾウ」と読むのが正しい。「ミソユウ」などというのは誤りである。「未曾有の大地震」などをいう。
- 高飛車：威圧的。　「高飛車に出る」「高飛車な言い方をする」などと言う。あたまごなしに威圧すること。もと、将棋の術語。
- 女坂：傾斜のゆるやかな坂。神社仏閣などで坂道が二つあって、急な方を「男坂」、女の足で のぼれる ゆるやかな坂を「女坂」という。
- カラスの行水：大急ぎで入浴をすますたとえ。湯から出てきた人に対して「もうあがったの。まるでカラスの行水だね」などと言う。「行水」は、もちろん、湯や水をあびてからだを清めること。
- ねこのひたい：ごく狭い場所。「ねこのひたいほどの庭しかない」などと言う。もちろん、ねこのひたいほどせまいところから出た言葉。
- 遊説：自分の意見をとき廻る。最近は「ユウゼツ」と言う人があるが、元来「説」には「ゼイ」という音もあり、「ユウゼイ」と読むのが正しい。「遊」は「歩き回る」意。「首相は関西地方の遊説に出かけた」などと使う。また、議員選挙の時などに大声で叫びながら回ることがある。なお、「遊説する」と動詞としも使う。

日常で使われている言葉の語源についてシリーズにて配信を予定。(池田)

参考資料：“語源のたのしみ”岩渕鋭太郎著書

以上